

たてはく

令和元年度
後期特別企画展

「かがやく天産物 時代を越える立山ブランドを求めて」

会期：令和元年9月14日(土)～11月4日(月)

ご存じでしたか、この事実！

- * 享保年間、現地からの報告によると、江戸中期の芦峯寺には、“オオカミ”がいた？
- * 慶応2年、幕府が参加を決めたパリ万国博覧会への出品を呼びかけるお触書は、ちゃんと芦峯寺にも届いていた。
- * 明治6年のウィーン万国博覧会には、越中・立山で採集した鉱物が展示されていた。
- * かつて、芦峯寺には炭鉱があって“芦峯寺駅”から石炭を積み出していた！ 他

江戸中期、幕府は日本初の全国的な産物調査や、採薬使を各地へ派遣して新たな産物の把握、薬種を探索を行いました。

そして明治初期、殖産興業を標榜する新政府も、全国的な資源・産物の調査を行いました。

これらはいずれも、産業を興し国を豊かにする新たな産物へ向けた熱い眼差し—時代を越えて日本中に“かがやく”天産物を求めた動きだったように見えます。もちろんその視線は、立山ブランドとなるような天産物を求めて越中・立山へも向けられました。

この企画展では、このような江戸から明治、そして昭和へと、天産物を豊かさにつなげようとした営みに光を当て、そこにあった天産物をめぐる“立山”のかくれたエピソードを紹介しています。(吉野俊哉)



初公開！立山炭鉱坑道入口銘板(当館保管)



会場 展示館1階、企画展示室

開館時間 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料 一般200円、大学生100円 ※高校生以下は無料

休館日 9/17、24、30、10/7、15、21、28

【企画展担当者解説会】

10/19(土)、11/2(土) いずれも14時から開催。(約1時間程度)

目次

令和元年度後期特別企画展「かがやく天産物 時代を越える立山ブランドを求めて」	1
山岳集古未来館資料紹介	
堀田彌一資料から—ナンダ・コートの装備⑥ 目出帽	2
令和元年度文化講演会「ライチョウの一年—立山の調査で見てきた高山鳥の素顔—」を終えて	2
前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」を終えて	3
「ミュージアムdeナイトin芦峯寺」“地獄博物館”へ大変身!	3
博物館実習を終えて	4
まんだらナイトウォークを開催!	4
ナゾはすべて解けた「たてはく探検隊」	4
編集後記	4





山岳集古未来館 資料紹介

堀田彌一資料から—ナンダ・コート—の装備⑥ 目出帽

1936年の立教大學ヒマラヤ踏査隊（ナンダ・コート登攀隊）、堀田彌一隊長の装備。今回は目出帽を紹介する。

隊員は各々、個人で幾つかの帽子を持参したようで、湯浅巖にはベレー帽を、堀田にはニット帽を被った写真が残されるが、登攀用に調製された踏査隊の被り物では、目出帽とオーバーフードの二点のみが堀田の装備に残される。

計画の原案というべき『1935年計画の概略 秘』（山縣ノオト）では「N.装備」に「7.帽子」の項目を設けて次を記す。

コルク製のヘルメット

絹のツキン、ウールの目出帽、犬皮の飛行帽型の奴。

悪天候のときの爲、皮の半マスク、鼻の部分は毛皮にメガネをつけたもの、口の部分だけ穴のあいたもの。

この原案から具体的に、どのような帽子類の装備が実現したかは判然としないのだが、「ウールの目出帽」は、原案の構想がそのまま採用され、かつ実物が今に伝わる唯一の被り物である。

因みに、「コルク製のヘルメット」とはコルクヘルメット（cork helmet）のことだろう。これは、形状や材質、用途によってピスヘルメット、トロピカルヘルメット、サファリハット等と呼称される軽量で防暑用に開発された一群の探検帽の一つ。写真記録に依れば隊員たちは、インドア・パターンのような形状（ないしはこれに類似）の製品（コルク製か否かは不明）をベースキャンプ地へのキャラヴァンに用いたが、その実物は伝存しない。

山縣ノオトにない「オーバーフード」は、ノオトに提示されたアイデアが再構成されて実現した被り物の一つと思われる。これについては稿を改めて紹介する。

さて、堀田の装備に伝存する目出帽は、釣鐘型の紺色羊毛編みで、上下に編みの異なる三つの部分（仮に、頭部・覆面部（後頭部共）・頸周部）で構成される。頭部下端の覆面部最上部分に不齊な長形状の開口（目出窓）があり、開口上辺（即ち頭部下端）にはフラップないしはタブ様の庇が附く。

頸周部は装着時の開口部をなす二目ゴム編み、覆面部（後頭部共）と庇は一目ゴム編み、頭部は表裏（外内）二重（二枚重ね）で共にゴム編みかと思われ、目数の増減？等の変則的な編みで釣鐘型の立体構造を実現している（編みの詳細は現在調査中）。商標やタグなどは一切ない。

目出窓の庇は、両端部が開口両端よりもそれぞれ約5cm

長く、その上辺が頭部下端（覆面部上端と窓上辺）の帽本体内部（裏）側に接続固定（両端端辺・下辺は自由）される。その幅は両端で広く中央で狭い（即ち、庇先（下辺）は上に凸の曲線を描く）。これはゴーグル装着時にその形状に柔軟に追従し、目出窓周りに直接外気へ開放された間隙を生じさせない工夫であろう。

この毛編帽を目出帽として使用している写真はごく僅かで、当然使用したであろう状況下の写真ではフードを被った隊員の後ろ姿がほとんどで目出帽としての使用状況はよく判らないのだが、目出帽の下半を折り返し、また捲り上げて使用した、と思われる（断定はできないが）写真は幾枚も残されている。目出帽は、登攀行程を通して常時、隊員に愛用されたアイテムの一つだったに違いない。（吉井亮一）



堀田彌一の目出帽

全体観（写真上左：正面観（前後に潰した状態）、写真上右：側面観（左右につぶした状態）、目出窓と庇（写真中：表、写真下：裏）。全体寸法：高さ約35cm（前後に畳んだ（つぶした）状態）、横幅約23.5cm（目出窓の位置）、下端横幅約22cm。目出窓寸法：長さ（横幅）約13.5cm（上辺）・約19cm（下辺）、高さ（縦幅）約3.5cm（両端とも）・約7cm（中央）。庇寸法：長さ（横幅）約23cm、高さ（縦幅）約5cm（両端とも）・約3cm（中央）。以上の測値は、使用時の伸張が戻らぬ状態となったままの現状での計測による。

令和元年度
文化講演会

「ライチョウの一年

—立山の調査で見えてきた高山鳥の素顔—」を終えて

本年度の文化講演会は、8月3日（土）、富山雷鳥研究会の松田勉先生をお迎えして、立山町元気交流ステーションみらいぶで開催しました。

講演では、ライチョウの名前の由来のほか、松田先生の長年の調査成果が紹介され、ライチョウの生態をユーモアも交えながらわかりやすくお話してくださいました。また、長年の定点観測の写真もあり、立山のライチョウの現状について比較しながら詳しく紹介してくださいました。松田先生の「ライチョウ愛」が感じられる講演に、来場者も興味深く聞いており、中には「おもしろかった」「ライチョウがかわいい！」と声を掛けてくださった方もいました〔参加者54名〕。

（細木ひとみ）





前期特別企画展



「立山ふしぎ大発見!？」を終えて



令和初の特別企画展となった「立山ふしぎ大発見!？」。

7月13日(土)から9月1日(日)までの夏の特別企画展ということもあり、本年は「立山のふしぎ」を楽しく学べる展示を心掛けました。

今回の展示で、特に人気のあったのが「くたべ」と名乗る、顔は人、体は獣の不思議な霊獣です。湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次ものけミュージアム)所蔵の「越中国怪獣 クタへ」という刷り物で有名なくたべは、立山に薬種を掘りにきた者の前に現れ、4、5年のうちに名前のない(知れ渡っていない)悪病が流行し、多くの老若男女が死することを予言し、自身(くたべ)の姿をみればその難を逃れることができると語ります。そして、見ることのできない人々のために、自身の絵を描いて知らせるように伝えるのです。刷り物の中には、立山のくたべを面白おかしく変えられて頒布されたと考えられる越中の「スカ屁」(大阪府立中之島図書館蔵)もあり、立山のくたべが諸国で大流行したことがうかがえます。刷り物は多くの人々に頒布された(販売された?)と考えられますが、立山信仰の活動拠点の村である芦峯寺・岩峯寺では「くたべ」の存在は語られていません。また、出現したのが「薬種を掘りにきた者」の前であったことから、くたべの流行に富山の薬との関係があるのかもしれませんが。

もう一つ、「ふしぎ」が溢れ、大人気だったのが、岩峯寺の中道坊で祀られていた「天狗様」。天狗の頭鼻骨(頭蓋骨)ということですが、イルカの骨のようです。この旧宿坊家がどのようにして手に入れたのか、どのような信仰で、祀っていたのか、など、わからないことが多く、本当に「ふしぎだな」と思う天狗様ですが、その存在は知られていませんでした。本展示の開催が呼び寄せた、まさに「立山のふしぎ」の大発見!となったように思います。

とても「ふしぎ」な立山のくたべや天狗様。本展示では、その存在を知ってもらうことにとどまりましたが、今後も調査を継続していき、新たなことが発見できたら…と思います。最後に、本展示にご協力くださった皆様や来館していただいた皆様に感謝申し上げます〔来館者4,986名〕。(細木ひとみ)



「ミュージアムdeナイトin芦峯寺」 “地獄博物館”へ大変身!

3回目となる「ミュージアムdeナイト」(ミュージアム<博物館>でナイト<夜>を過ごそう)。今年は、8月10日(土)&11日(日・山の日)に開催しました。

今年も、展示館を真っ赤な「地獄博物館」に変身させ、学芸員による夜の特別バージョン「立山曼荼羅絵解き解説会」、「閻魔大王&立山の天狗とのクイズ対決」を行いました。また、教算坊の庭園はライトアップして光の幻想的な空間としたり、山岳集古未来館も合わせて3館をめぐる「立山地獄巡りスタンプラリー」をしたり…。今年も「怖いこと」「楽しいこと」がてんこ盛りの2日間となりました。

だいぶ知れ渡ってきたのでしょうか!? 2日間で展示館・常設展示497名、企画展示471名の来館者がありました(教算坊1,084名・山岳集古未来館495名、ともにのべ人数)。

「夏の夜といえば、恒例のアレ」となるよう、今後も新しいことにチャレンジしていきます! まだ参加したことが無い方は、ぜひ来年「地獄に堕ちないためにどうしたらよいか」を遊びながら学びに来てください。(細木ひとみ)



立山の天狗

地獄カフェも開催!

今年の「ミュージアムdeナイト」では、3年ぶりに「地獄カフェ」を開催しました。幻想的にライトアップされた教算坊庭園に、2日間だけの仮設ショップを作りました。目玉入りの「血の池地獄ジュース」をはじめ、新メニュー「天狗の涙」も登場し、夏の暑い夜にご来店いただいた皆様に、目玉がごろごろ入ったメロンジュースをご堪能いただきました。おかげさまで、いつも大人気の「地獄カフェ」、次はいつ開催されるのか!? (加藤基樹)





博物館実習を終えて

立山博物館では、学芸員資格の取得を目指す大学生のための博物館実習を毎年実施しています。今年度は、8月20日(火)～23日(金)および8月27日(火)～30日(金)の計8日間、2名の県内の大学生が参加しました。学芸員の役割である資料の整理と取り扱い、展示研究、教育普及や広報の技法、害虫の対策など、多岐にわたる内容を現場で学びました。最終日には、来館者にむけての展示解説、さらには立山博物館の現状に対しての意見プレゼンをしてもらいました。これらの実習を通して学芸員という仕事の重要性を肌で感じてくれたのではないかと思います。

来年度も実施しますので、大学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。(高野靖彦)



まんだらナイトウォークを開催!

令和最初の「まんだらナイトウォーク」は、雨で全日程2日間が中止となった昨年を含め今年で13回目を迎えました。今回は9月7日(土)～8日(日)の2日間、18時30分～20時30分(入苑は20時まで)で開催しました。初日に1日の入場者として過去最高の1,611名の入場者があり、2日目も1,193名と多くのお客様に無数に広がるキャンドルの炎やLED電飾による暗闇と光、またアロマやお香による香りの幻想的な世界をお楽しみいただきました。今年から一部を除き写真撮影が解禁となったまんだら遊苑は、SNS、Instagramに多くの投稿をいただき富山のインスタ映えスポットとしても人気が高まっています。これをきっかけに来年のまんだらナイトウォークはもとより、昼間もお越しいただければ幸いです。(岩崎証意)



ナゾはすべて解けた 「たてはく探検隊」

7月27日(土)、23名の小学生が参加して「たてはく探検隊」が行われました。

隊員任命後、立山曼荼羅の絵解き、企画展の「立山のふしぎ」探し、そして閻魔王に面会と、「修行」を重ねました。人気の布橋渡りと立博特製の「地獄スイーツ」も体験

しました。

最後に、隊員たちが修行で入手したパズルから暗号を解明し、「宝箱」を探し出して任務を完了しました。

保護者の皆様、ボランティアの方々、ご協力ありがとうございました。(森山義和)

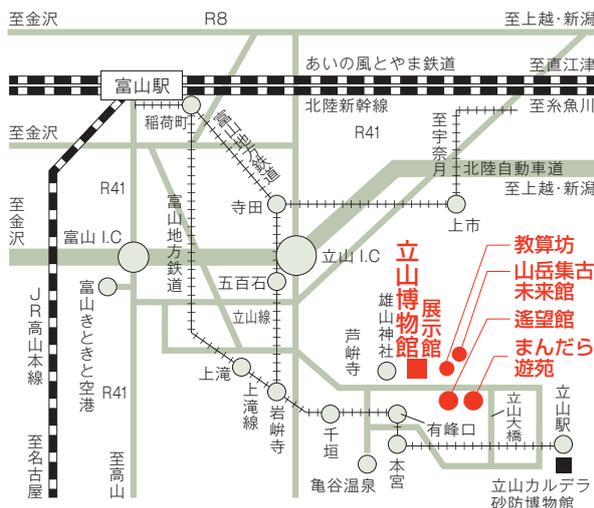


編集後記

前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!」展、「ミュージアムdeナイト」、そして「まんだらナイトウォーク」など、夏イベントで大変盛り上がりしました!

立山研究の分野でも、貴重な立山信仰関係資料のご寄贈が相次ぎ、収集・活用に向けての調査・研究を進めています。立山に関する様々な情報がございましたら、立山博物館学芸課へお知らせ願います。(加藤)

案内図



- 最寄り駅
富山地方鉄道立山線千垣駅
下車徒歩(約2km)
※日曜を除き町営バス運行
「雄神社前」下車すぐ

- 自家用車で
JR富山駅から 約45分
立山駅(千寿ヶ原)から 約10分
富山インターチェンジから 約35分
立山インターチェンジから 約30分

立山博物館のホームページはこちらから。



人間と自然のかかわり方を学ぶ

富山県[立山博物館]

〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1
TEL 076-481-1216 FAX 076-481-1144
<http://www.pref.toyama.jp/branches/3043/home.html>

Facebook あります! 立山博物館

